EV. 19コ

PL788
.4
.G4
1654
vol. 19
copy 1
Asian
Japan
Case

THE LIBRARY OF CONGRESS

2004551302

（源氏廿七より廿一文の秋までのるを）
文こゝに成りまゝに河づらのすまねいとゞ心ぼそさ（明石ム）
まさりてうゐのそらなる心ちのこゝしけく。あし
らしすを。（源）君も程なくていえすぐさじ。（夜）ちうさ和
ひたちるとすゝめ人ど。つらさ和あほく。こゝろ
こゝろてんも御りなき心ちすべきを。いかゝいひてか
などいふやうにせひこゞれたり。（源詞）さらば此つゞ君を。
よくてのこゝいびんなきことなり。せふこゝろあれどか
（中ぞ文ことあげすこ）
たしけなし。（雲）夜いまこそをきてつるにゆしゞうを。
しぞしこゝろしいさをて。たゞ夜ぞのことなども。人
しれぬさ夜ならずしれさんとなんおもふと。まゝ先
やうなるしひ給。（明石ム）さあぼすらんとおもひつゝこ

とあれど、いとゞむすつぶれぬ。おしこめてやむごと
なきかたにもてなされ給ひ、人のもりきかんことハ
中々にやつくろひがたくおぼされんとて、ちなち
がたくしひたる。ことゝもりにはあれどうしろやも
うしぬかたにやなどハなうたがひ給ひ、かしこには
しらへぬれど、かゝる人もあるさがさうぐしく見
ゆるまゝに、前斎宮のおとなびもれし給をぞ
こそ、おれがちにおぼかひきこゆめれば、ましてゝ
かくまくこゝろげなめる程をなろかにはしひたるつ
まじき心ぞ人になんと、女君の此有様のおもふやう
なることもかたり給ひ、けにいかしへもこゝろぐるしう

ことに。さぶまりぬべきまうと。つてにもほの罪し。
情心(源好色ノ)のなぐりなくしげまりうまへるも。おぼろけ乃
れすくせにもあらず。人(紫)のれあるさ夜も。うらしきれ
中にもてぐれぬへるにこそいと。しひやられて。かぞ
ならぬ人のならびきこゆべきおぼしにもあらぬを。
さすがにさちいでく。人もめざ夜しとおぼしことや
あらん。げが身いとてもかくてもおなじこと。おひ
さ記とをき人(姫志)のれうへも。つねにはかのれ(紫ノ)こころ
かるべきにこそあめれ。さりとならば。げにかう
なるごろなきほどにや。ゆづり罪しましとしふ。又
てをもなちてうしろめたからんこと。つれぐも

ぬて。更衣（ふい）どしらといふれさまひしけぢめよこそ
おもすめれ。ましてこゝ人はなずしふへきことなるも
あらず。又みてこちたゞのれいしといへどなをさし
むかひこゝろをとりの事には人もさひおさし。おやの
れもてなしもえひさしからぬ物なりましてこれは
やんごとなきれうこゝにかゝる人いでものし
給ひしこゝになくけれのひなん。程くにつけて。
おやにもひとつしもてかしづれぬる人こそや
がておさしめられぬもじめとはなれ。れもう海さ
の海どもいとじきうろをいくすとも。かれ深山（ミやま）
がくれにてはなるのも人かあらん。こゝまうを四九

ことゝいはるをいと衰ゝおぼゆれど、[非意]君のれうあるよりの
べきことをこそもとねんずめれとをもひきけれ
なんことおけられの物おもしさうれぐをも
けうらひてなぐさめなしひつるゝいとぐ多けぎ
なきことをきへさりそへいうじう覚ゆべきことく
君もなくめれともさるべきにやおぼしぬさ夜にて
三年りそめてさし此のれ心ぞへのけまれぐうこ
ひしうおぼしぬべき代うちうえこさしゆかことは
よも侍らじつゐにはとゝ夜のこなぐしもし
にてもよそくにもひのかゝれまじらひし侍
らんかやすらしずも侍べきれなどうちなきけく

すぐすほどに。志ゑすまもなりぬ。雪わられがちに。
心ぼそさまさりて。おやしくさ海ぐに。柚なもふ
べかりける身かれとうちなげきてつゐよるをこれ
[illegible]をなぞつくろひつゝぬるり。雪かき蓄しかり
[illegible]あしに。きしかたゆくさきのことのこうぶ
志ひつゞけて。れいもことまもしぢゝすなりでね
などもきぬをみぎはのうほりなどこやアて。志ろき
きぬどものなよくかなるにまくきて。ながめこうやう
ないかしらけきうしろでなど。かぎりなき人と
きこゆともかうこそおもすらめとこゆ。おけるな
こゞことかいもしひてかやうなるん日。ましていかに

かりけり人のすくをかれとおもほせ。これ妻ゝ
おふすれぐし。おまそぎ（そくきイ）の程にて。ゆしくとめで
たく。けしつきまこのほれりほどなど。いへださら
なり。よその袖にしひやうん程の心のやうをしハかり
給ふ。いとうろぐるしかれば。うち久しの給ありけ。
なまかく口おしきものほどなしずごゝ。もて
なし給ひてときゝもり袖からねんじあへどうち
なくけたひ衰なりひめ君ハなる心もなくて此車ま
のしんことをいそぎ給。よをうち取ふ。（四名）ぎんぎみ云ふ。
かしいぐさいでぬへり。かゝことれこ忍ていとうつ
くしうて。袖をさしへてのまとまへどひくも

いうじうおぼして

（略）来とをきゝる紫の松にひきつれいけり

木ごうさうげをうるべき。えもいひやらず。いうじう

なけば。（添ふ）さりや。おれくるしとおぼして

（添）おひそめしねもふかければこけぐ海の松に

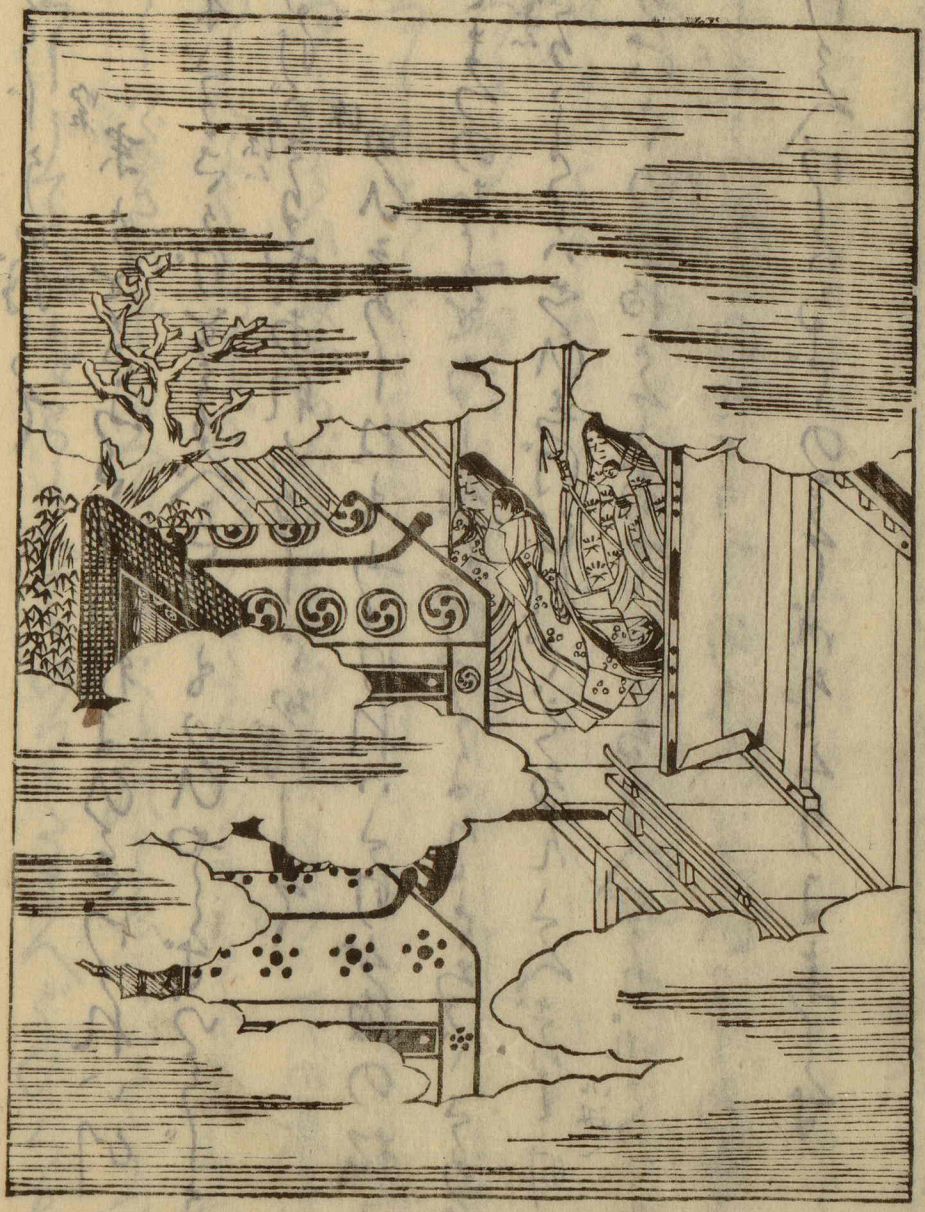
こまつのちとをなしぐん。のざうにをとなぐさめ給。

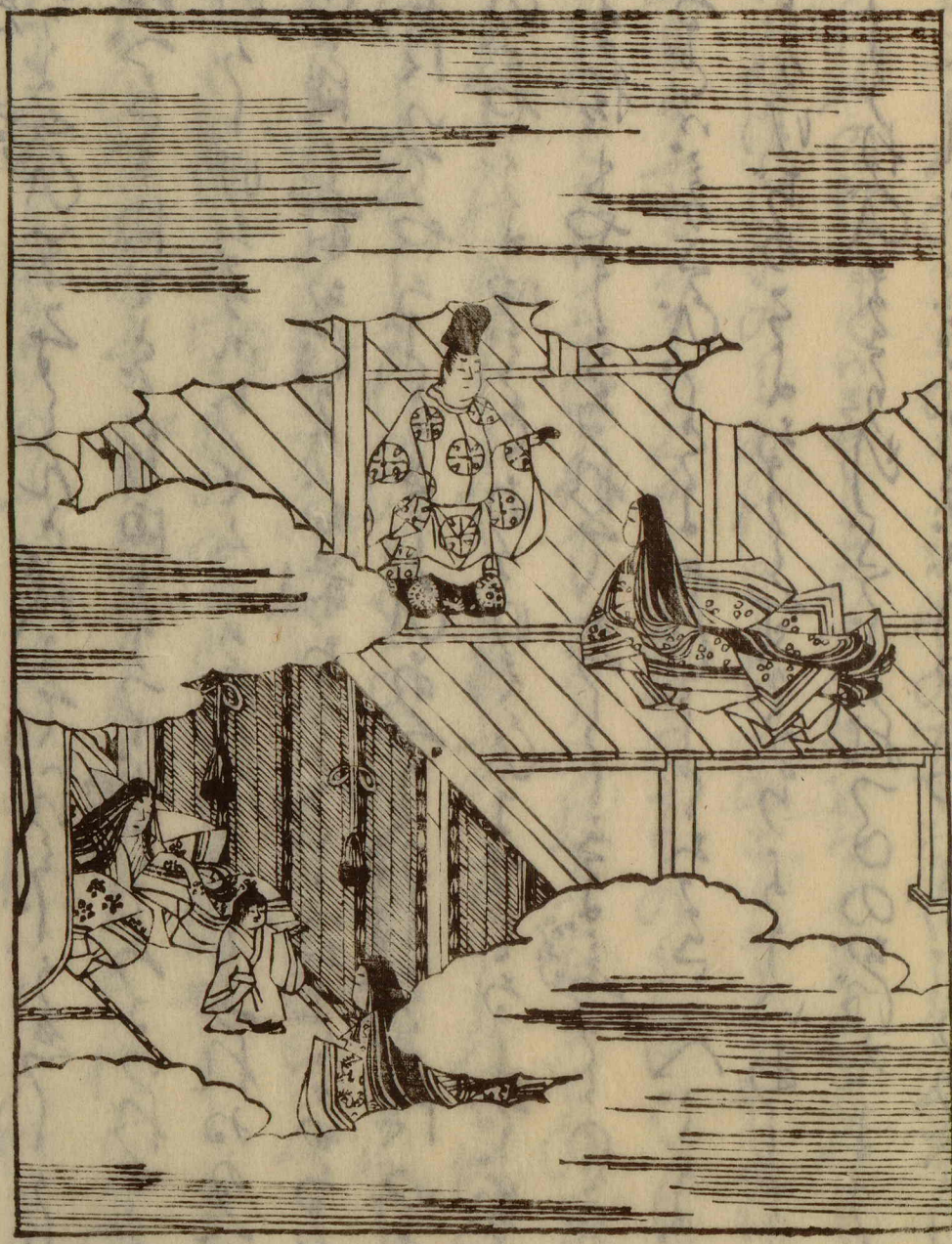
（略ふ）さうことゝはせひしげむれど。えなんこへざるとける。

めれとのかねとて。おてやうなる人づかり。（活鈔之）れたりし。

（尼）おまがつやうの物とりてのる。人ごまひにようしきき

ワラ人。ワしはなぐのをて。れをくりに来しす





せまくぬひがものなり。おや（入道）の罪しなどこそくるし
それ。人の程などいさてもあべき拙をなど云せ。たつる
あるぬほどこのこあれば（ことゆ）や。心のどうなしぞこち
へりぬふもくるしくて。愛のつくりのうきもし
うとのこうちなげられて。さうの琴のあるをひき
よきて。かれあるしまてさ取ふけうりしねも。例の
おぼしいでらるれば。びさをつりなくをめうまへば。
すこしうきあつきさう。いつ（添ん）でうのこひきまくべし
けんとおぼさう。つゞ（姫君）君のれことなど。こ由やうようる
まぬひつくおもす。こくもうらかさしろなれど。かや
うこうちさまりぬふおりくあれば。もうれる

まもれいまゝぐへ分月日星(ほし)の光こゝ雲のうく
ぎまひありとのこゝ世の人おどろくことおほくて
こちくのうんぐへ父どもなれるまもあやしう
世まちすべてなるぬことゞもまじまとり(涼ん)うちれ
おとゞのこゝなんれこゝろのうちるまげしもしくお
ぼしきらくことありけり入(左つが)ゐきいの宮芸乃
始よりなやこゝつゝをもて三月まいいとをもく
なるをもひぬれば(冷)日華などあり院(桐つぼ門)に別(まれ)なるを
もひしほどはいといたけなくて抱かくもおぼ
されざりしをいこじうおぼしなげきたるれ氣色
なれば宮(左つがん)もいとうるしくおぼしめさる(詞)ことしハ

かなしぎのがうまじきさとしとおもふおもへつれど
（此七ハ女ノつゝしむ年也）
おどろくしきこゝちにも侍らざりつれば命の
うぎりしりがほに侍らんも人やうたてことく
しうおもはんとはぐうりてなん。をどくのこと
なども。つぎとれいよりもさりつきてしも侍らず
ありにけり。来りて心のどうに。芳の此物語もなすぐ
おもひおへなぐらぐ。何しざ夜ちかおりすくなく
侍て。くちおしういぶきてすぎ侍ぬることゝ。いと
よはげに罪を給。此七まぞおりしましけり。されど
いとつくさりにおりしますさま紙。おしくかれ
（冷ム）
しとこなしを給。つ（詞）しまをぬべきれとしあるに。

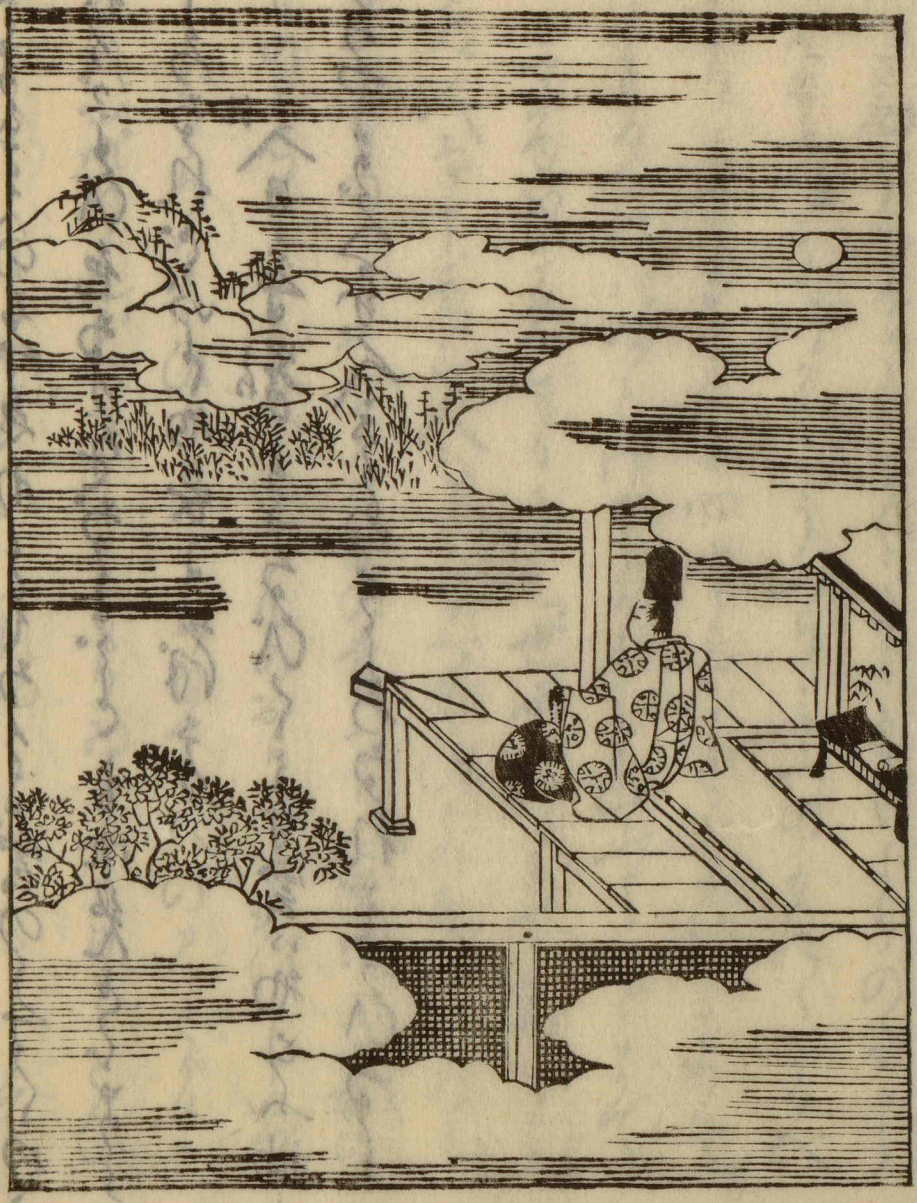
それぐしうで月比色さを結ことぐまなげき
ひたり侍つるは此ひくしまなどをもつ事よりも
ことはきさせ給ハざりけることゝいえじうおぼし
めしたり。さぐこのぐろぞおどろきてよろぼのこと
きさせぬふ。月比ハつれの此なやみとのこうちさ
ゆゑたりつるを源氏のおとゞもみくおぼしいり
たりがぎろもあれど御どもなくへしをたまふと。
なるしきことおぼかり。家いとくろしうて。たらぐ
しう細も罪しさを結ぶず此心のうちはおぼしけど
くるはさうさすくを世のさうへもなるぶ人なくそ
ろのうちはあらずさふとも。人はまさりけり男と

行ふんことも。のこりなき心ちなんし行とまさて
給ほどまと（放つか）もし火などのきえいりやうまてにて給
ぬれば。いふ（添ん）ひなくうるしきことをなげしなげく。
（地）うしきの男の程と罪ゆり中にも。此心（放つかり）どんなどの。
世のこゝろにもあまねくあられにおりしましてかう
けることよきて。人のうれへとあることなどもなどの
づくうちまじ事をいさくかもさやうなること志
こゝれなく。人のつうまつることをも。世のくらし
ひとをべきことをばとゞめぬふ。そどくの方とても。
すむりにようなて。いりそしうそげくしうふ
なふ人などむりしのさしき世にもこれをけりを。

これはさやうなることなく、ただ、もとよりのこゝろ
もれえぬなべきのうさ、かうかりこゝろのもれくさらべ
きかぎりして、まことに心ふかきことぐ、もれかぎりを、
しをうをぬへれば、ぬとつくまじき山ぶしなどまで
おしこ字も、おさゆんなるにも、世中ひぐきてかなしと
ちもぬ人なし、我ぐ人などなべてひとつ色にふろこ
つらりて、ものゝもへなき、其の言なり、二深院の此前の
様をかゝんじても、其のこんのおりなどおぼしいづ、
しとしぢうりてひとりごちなて、人の見とがゆん
のべかれば、此ねんぞぐうにこもりぬなて、目ぐとひ
なさゝらしこまふ、此ひもれやかりさして、

ツ六

やまぶきのあぎ忍あらそなりに雲のうすくけて
れりがよび色なりをおよごともれ光とぶまらぬ
ころなれどいと地衣におぼさり
入日さす峯(ミね)にくるびくうす雲は地さふ袖に
いろやまぶ家へさらぬところなれどうひなし



れ(ニ若ブ)ばなどもはさきて、ことにもしづまりて、(冷)ぞ抱心
げそく思しこり、此入(若ブ)の家の御母ぞ、ぞ記の御世に
望つるなりて、れいのりの師まで、さふらひけれ
俗(そうづ)故(若ブ)家にもいとやんごとなくしたる抱に
思しこりしを、(冷)おほやけにもをもきれおぼしまて、
いかしきれ(ごぐん)軍どもおほくそそく、世にりし
ときひだりありけるとし(俗)七十(あまそぢ)ばかりまで、今は終(とり)の
をこなひをきんとてこもりこるが、(若ブ)こやの御ことに
よりていでこるを、(冷)うちより思しありて、つゐに
さふらはせ給、この代は私もとのごとくありさふら
さらべきよし、(源)おとゞもすくめのあへば、(俗)いまはよね

ちどいとこへがこうおぼし給れど、おほをごとゝ乃
うしこゝさまよりふるきれ心ざしをそへてとて
きつゝふまゝ志げかるゝあるけきてり、人もちらくさ
ふしもぞおるはまゝでなどしぬる程まうぐいる
うちしもぶきつゝ世中のことぜそうしぬふつゐ
でまいと(河)そうしがこゝろてかりてはつゝまもや
まりあるんとおもへちゞかることおほかれど、
志ろしめされぬまつゝをもくて、天(まん)のまなこおそ
ろしくせふのへらしことをこゝろまむとび給けく、
いのちをとり給なばなるのやくかは給へん、仏も心
ぞくなしとや志しめさんとぞかりぞうしきして、

えうらいでぬことありうへ（冷ん）なるまごとなるん。これ
世まうしそのうらべくせふことやあらん。ぼうしハ
ひぢりといへば。おうまじきよう猿（さま）のそゐこゑく。
うてあんなるものをとゝしていけ（討）なりし
ときより。滞（つざて）てせふことなる紙。そこまハかく悪び
のこされたること。有けるをなん。つらくせひぬるとの
給はすれば。おなかし（僧加討）こざしま仏のいきめまもなし
給ぜんごむのつきこうをざまかくしとぐすら
ことなく。ひろめつうまつれりまして心まん海
あることなるまごとまゝ侍らん。これハきしうさ心く
ささのぢ（ぢ）と侍ることをすぎなりしましまし

いづし給ぬることゝなくなくきこゆるほどに。あけ
はてぬれバまかでぬ。うへハゆめのやうにいみじき
ことをきこしめして。色々におぼしみだれさせ給。故院
の御ためもうしろめたく。おとゞのかくたゞ人に
て世につかへ給ふも哀にかたじけなかりけるか
たがたおぼしなやみて。日たくるまでいで
させ給はぬを。かくなんと聞給ひて。おとゞもおどろき
て参り給へるを御覧ずるにつけても。いとゞ
志のびがたくおぼしめされて。御涙のこぼれさせ給
ぬるを。おほかた故宮の御ことをひるよなくおぼし
めしたるころなればなめりと。見奉る。その日

或(桃園ノ)なるのみこうをぬひぬるゝしそうすりまいよ(冷ム)
いよ世中のさはがしきことをなげきあげし
こりかうころなれば(添)おとゞハ此とまもえまうぞ
給ひて(冷)けとさしひぬふ(冷)しめやかなるれ此紙乃
ついでに(刊)世ハつきぬるにやあらん。此れころぼそく
例ならぬ心ちなんするを。何めれしこもうくのどう
なるぬにうろげあはしくなん(茂ブ)古文のあげさむ
所よりてこそ(まれなる)世乃のこともしひとぐうとつれ。
いまは心やすきさ夜にてもすぐさ夜ほしくなんと
かくしひ罪し給ひ(添訂)とあるまじきれことなり。世れ
きづかならぬことハかならずまつりごとのなくとくゆ

めさられバ、ひとりでこのことをかすめきこえたるやと
おぼせど、さすがまたしたるくもおぼしぬべきこと
なれバ、ひきれこちらつくましく、ふともえうち
いで罪しぬるぬほどハ、こゝにおぼうるのことゞもを、
つゐしりことはなつかしう罪しきを給うちうしこ
まりぬへるさ面まで、いとれ気色ことなりを、うし（添ん）
こき人のれめまは、おやしとこまりこまへど、いと
かくさゞくと、（冷ノ）ふろしめしたるんとは、おぼさゞ
まかり、（冷）うへハ、王命婦（まうしやうぶ）なりくるしきこと、どハま
ほしう気しめせど、いまさらにしか思ひ給ふん
ことしりまかりとかれ人まもおもられじ、こゝ

なさゞまいぞ同のめしとひきてして、さきぐ
かうことの例もありけんやと、さうんとぞおぼを
ど、さらまつゐでもなければ、いよく此学宮をを
させ給ひて、さ面ぐまふことをなれんずるなり。
もろこしにはあらもれても、志のびても、えぐりがは
志さしといとおほかりなり。日本にはさらに此ん
じうの取なし、ことひあらんにてもかやうに思び
さらんことをばいぞかつゝへしなやうのあらん
とする。一世の源氏、又納言、大臣に成て、後にさらに
見ることもなり。位にもつきぬへるもおまたの例あり
なり。人がらのかしこさることよきて、さもやゆづり

ゑへしましるがいみじげにぞ見えける。秋の行さき
めしよ。大殿だにに数寄べくしうちくはさぐめ
中務ついでにあん。みなじあげしうするすぢの
こと。ましうきうし給けりせ。あさびいとまぜゆく
ねそらしう見えしてさしるあるましいよしをや
色し給。極院の流れ心ざし。おまくのこゝ遊の流れ中に
とりけさそ見しめしわざし。位をゆづりしを給りん
ことを見しめしよしずありにそりなりまりそのれ
心あかしあそ。ともだめきくはのばり給へん。さぐ
ましの流れあきそのまして。あけやけるつうまり
て。かな殿をえしのあそひたおり給へんちがば。のどり

なりをこなひまこまり侍りなんとせひおふかと。
つるのはことのちまかちしぞそうしこまへば。いと
くちおしうなん覚しける。大殿だにまなりおべき
さざめあれど。志ばしとおぼすさらありて。こゝは
ちゝねそひて。牛車ゆりされて来りまゝで志給を。
はかどあらずかうじけるさ物まおもひさこしおて。
なをみこまなりおべきよしを覚しの給もすれど。
世中のはうさろこしおべき人なし。侍中納言大
納言まなりて。右大将かけおへるを。いまひとさは
あがりなんまなまごともゆづりてん。さてのちはり
ともかくも志げかなりさ夜まとぞおぼしける。なほ

ゆくゆくとせし宿縁あさぎ。つらきをずこひ身としさを
ぬふ秋家女れは。おばしくもそのさされうしろを
まで。やんごとなきされおばしあり。御よういおり
き宿なすばし。おまふき宿ありおくまほしうこし
こまへれが。りこじげあまきまおまてりしげさ
あさうしこまへり。秋のころ二条院にまいでこまへり。
さん殿のれそうしひ。やうずりくやくざうしさ
まひて。いまはむげれおやざ宿まもておまてお(ぼ)つう
ひ男と語。秋の面いともづまかりて。おまへの前栽
のいろくされころつものまげさる。うめしへのこく
ざものきつげおぼし出れて。袖もぬれけり

女は（秋夏）のれるまゝ（源）にうりぬへり。之後やうちうまひ色
のれるをしすぐるまて世中のさはがしさるど
ことつけぬひて。やがて（ゑ）れさうぞんなれば。ずゝひさ
うして。れ之後よくもてなしぬへる。つきをすなま
めしきれ有信まて。之寺のうちにいるまぬ。れ（秋夏）九極
ぐうりを（つぎて）満て。（源）并づゝしきこゝ語。（同）前載どもこそあり
なくひもとき侍るなれ。いと地をきまじきこし
なるを心やまて時しりがほなるも。おそれまこそ
とて。おしらまよりぬぬへるなどへいとめでこし。
芳のれことでも。かれ望の家にこちにつゞひし明
月のなどをきそしいでぬふ。（秋夏）いと地衣と云しこり

つゝしまろうよろこびなどは。さしも心りかく
しまずかやうなるすきがましき方は。しづめぐらう
のこゝ給ひを。おぼろけにしひしのびたれうしろこ
とは。おぼししらを給らんや。衣とぐるの給ふまずは。
いまかひなく給らんとの給。む(秋さん)しうしうて。れいら
へもなければ。さり(淫汨)や。あれこゝろうとて。こゝくに
いひまぎらしし給つ。いまはいつでのどやかり。
いけるよれかぎり。おもふことのこさず。のちの世乃
しとめもこゝろにまかせて。こもりゐるんとおもひ
給ふを。この世のしひ出にしのべきかしの給らぬこそ
こすがにくちおしう給めべきれ。数(かず)なるゝぬ(ゆゑ雅ぶ)おさなきさ

ひとれ侍る。おひさ紀いとまちどをなりや。かうじけ
なくともな後はかどひろげさをなひて侍ぐなり
なん後にも。かずまへさをなへなどきこえなし。此
いしへはいとおほとなるさ海にかくうしてひと
ことばりかすめなへるけもひいとなつしげ。
[illegible]つきて。しめぐとくるくまでおいす。[illegible]
しきるれのぞこはさるもれにて。こしのうち
ゆきかくる時くの茶もみぢ。毛の氣色につけても。
こころのむしともしたりましがれ。其の茶のもや
し。秋の望のさりをさりぐに人おしそひ侍りなる。
そのころのげにと心にうどうりおしはなるさぐめ

いかゞせひつきはらん。げまいつとちきちるにおや
しとこそしゆふべこそ。ちうちうこそし（此意不了）給まし
鬚のよすがまも。せうまへられぬべかれと。しどけ
るげまのおひかけも。いとらうたげなるにえしのび
給ふで
（源）さこもさは衣をうちを人しれず我身にしむ
家秋のゆふぎ。しのびがたきありくも給りしと
笑し給ふ。いづこの（秋宮ノ）れいつ人はおしん。こゝろえずと
おぼしたる御気色なり。このつゐでに。えうめ（源ノ）おもえで
うしこ笑しおふことゞもあるべし。いますこしひ
ことも。しの給ひべかれど。いとうたてとおぼいたるも

火どものけのやまひのゆかりにこえまどふを
おしかりすまぬにたはじまどしましかば
づらにおぼしましとのたまふる
いさりせしけむすれぬうぢに火は身の
うらみやたるひさまにけん おもひにまどふれ
侍れどさもあれば
おきつぬたれおもひとたるがやなる
ぶなさ火のげはさしげりぶれうさまれどなし
へしうらのまふおはくまれたづさおはさよ
よろなれどうとさこそぶもれ心とまりて侍よりけ
ひじろへまかすやすゝしさひまどぶれけんとぞ

69038
6 AP 78